

新しき繁栄の時代へ向けて

〜 私たちは騙されていた〜

与国秀行

## はじめに

一般社団法人『武士道』を設立して、すでに約一年半が経過しました。私たちの目的は、日本人一人一人が「侍精神」を取り戻し、なおかつ日本から世界にかけて「新しき繁栄の時代」が始まっていくことにあります。

そして本書は、常識を逆転させて、新しき繁栄の時代を迎えるために書かれたものであり、内容としてましては、私たち人類の日々の暮らしと密接に関わっているものです。おそらく読まれる度に、驚きの連続でありましようが、ぜひ本書を読まれて、そしてこの内容を一人でも多くの方に、勇気をもって拡散してください。本書はネットから無料でも、電子書籍でも読むことができます。

なお紙代・コストを安く抑えるために、文字が詰まっていること、どうかお許しください。

一般社団法人『武士道』 特別顧問 与国秀行

## 石油に関する多くのデマ

「エネルギー」、この言葉に人類はどれだけ騙され、そして苦しめられてきたことでしょうか？なぜなら世界人類の苦しみの多くは、石油や石炭、天然ガス、あるいは原発をはじめ、どのエネルギーを利用するか？もしくはそのエネルギーをどのように入手して活用するか？こうしたことにあるからです。

現在、私たち人類は石油に依存させられて暮らしておりますが、では石油とは何なのでしょう？

「石油」と言えばガソリンを思い浮かべる人も多いでしょうが、ガソリンだけではありません。たとえばプラスチックは、石油化学によって生み出された石油素材です。石油製品を加工することで、合成ゴムも生み出されました。実は私たちに身近なペットボトルも、あるいはアスファルトも、石油化学の産物です。もしくは化粧品の大半は、実は石油由来の成分で作られています。さらに私たちが料理やお風呂を沸かす時に使っているガスも、正式には「液化石油ガス」と云って、やはり石油から作られています。そしてもちろん飛行機や車の燃料であるガソリンは、石油から作られていますから、農作物を作るトラクターも、食べ物を運ぶトラックも、結局は石油に頼っています。すなわち私たちの日常生活のありとあらゆるものが石油からできており、はつきり言って現代人は、「石油」無しには生きてはいけません。

しかも日本にやってくるその石油は、とても長い時間をかけて、地球の真裏からタンカーに乗せられて運ばれてきます。

世界の5分の1以上の原油が、「ホルムズ海域」というところを通過しています。ですからもしもこの中東の地で事件が起これば、原油価格は必ず急騰します。実際にかつて「第四次中東戦争」が起きた時、「オイルショック」が起こり、それまでペットボトルの水よりも安かったガソリン代は、数倍以上に跳ね上がりました。そしてそのままの高い値段でガソリン代は定着しており、その後も値上がりしてきました。しかもこのホルムズ海峡の幅は、最も狭い地点で約34キロ、しかもそのうち船が航行可能な範囲は、わずかに3キロほどの幅しありません。もし、この狭いホルムズ海峡で何か起こり、日本に入る石油が途絶えれば、その時点で、私たちの暮らしてはストップしてしまいます。

まさに人類は「石油依存症」の状態にあり、なおかつその石油が不安定な状態にあるわけです。ですから私たちは人類は、「七人の魔女・セブンシスターズ」と呼ばれる巨大石油会社、石油メジャーを豊かにしながら暮らさなければならぬわけです。そして「セブンシスターズ」は、石油に関するデマを言い続けて、私たち人類を騙してきました。

まず世の中に出回ってきた石油に関するデマとして、「石油はあと30年で枯渇する」というものがあります。子ども頃、そういった話を聞いて、誰もが不安を覚えたものですが、しかし30年経ってみると、またもや「石油はあと30年で枯渇する」と言われているのです。しかし世界中の多くの科学者たちが、「石油はまだまだたくさんある」と主張しています。中部大学総合工学研究所特任教授の武田邦彦先生などは、「科学的見地から石油は少なくとも2000万年はある」と述べています。「2000年」ではありません。「2000万年」です。

いったい「エネルギー」というものをめぐって、何が起きているのでしょうか？いい加減、世界人類は、「エネルギーのデマ」から目覚め、この「石油奴隷支配」から脱出しなければなりません。本書はまさに現代の「奴隷解放宣言」であり、新しき繁栄の時代を迎えるあたり、知らなければならぬ情報が詰まっています。

## 神秘の草と日本の歴史

「石油奴隷支配」から脱出するために、どうしても紹介しておきたい植物があります。「ヘンプ」という神秘の草です。

実は日本人にとって、この神秘の草は先の大戦に敗れるまで、とても馴染み深い存在でした。戦前まで「ヘンプ」は神棚

に祀られ、神道ではこの神秘の草は、絶対に無くてはならない大切な存在でした。

そして「ヘンプ」というこの神秘の草は、石油にすべて代替し、そしてすべてのすべてにおいて石油を超越する存在であり、なおかつこの神秘の草は、北海道から沖縄まで、どこでも育つのです。いや、神秘の草ヘンプは、北極と南極、砂漠を除いて、地球上のどこでも育てることが可能なのです。

ですから私たちが意識さえ変えれば、すぐそこに「石油依存症」をやめる繁栄の時代の扉はたしかにあるのです。それはつまり現在の私たちは、「石油奴隷状態」にあるわけですが、神秘の草ヘンプを使いさえすれば、私たちの暮らしは、必ず見違えて豊かになれるということです。

しかし残念ながら私たちは、その神秘を使うことができません。なぜでしょうか？ 私たちが神秘の草を使えない、その理由を知るためには、日本の太古の歴史を振り返る必要があります。

神道の最高神であり、伊勢神宮に祀られている天照大神は、弟の須佐男命があまりにも乱暴を働くために、岩戸の中に隠れてしまいました。『古事記』によれば天照大神が姿を消したことで、世の中は闇に包まれてしまったそうです。

そこで神々が集まり話し合います。思兼神おもひかみのかみが一計を練りました。神々が協力して八咫鏡と、八尺瓊勾玉やしまかどのまがたまを創り、天宇受売命あめのうすめのみことが肌もあらわに踊ると神々は大いに笑いました。するとどんなに説得しても、岩戸いわかどを開けない天照大神でしたが、天照大神はその「笑い声」が気になって、少しだけ岩戸を開けました。この隙に手力男神たぢからのおのかみが岩戸をこじ開けました。こうして太陽神が再びお戻りになられて、日の本は明るくなりました。

「芸能」と「笑い」が太陽を昇らせた日出国ひのすくに、それが私たちの国、日本なのです。

その頃、高天原を追放されて、出雲国いづむくにに降り立った須佐之男命は、八岐大蛇を酒で酔わせて、八つの首を斬り落とししました。大蛇の尾の中にあつたのが、天叢雲劍あまのむらぎのつるぎです。須佐之男命はこの天叢雲劍を天照大神に献上しました。岩戸開きの際に造られた八咫鏡、八尺瓊勾玉、八岐大蛇の尾から出てきた天叢雲劍、これら三つは、神道において「三種の神器」と呼ばれております。

そして天照大神は、孫にあたる邇邇芸命ににぎのひこに、この「三種の神器」と「稲穂」を渡して、「この稲を育て、葦原中国あしはらのなかつくにを治めなさい」と命じました。こうしたことににぎのひこから邇邇芸命が降り立ったその土地は、「稲を高く積む場所」として、「高千穂」

と名付けられました。これらが日本神話、『天の岩戸隠れ』、『八岐大蛇退治』、『天孫降臨』です。

かつて歴史学者アーノルド・トインビーは、「12、3歳までに神話を学ばなかった民族は例外なく滅んでいる」と述べたようですが、こうした神話を今現在の日本国民が知らないのも、けっして偶然ではなくて、意図的に仕組まれたことであり、日本人としての誇りを奪い取るためです。

あまのふしたまのみこと

さて、この『天の岩戸隠れ』の神話の中の一柱に、天太玉命 という神様がいました。天太玉命は岩戸の中に閉じこもっている天照大神の気を引くために、実は「神秘の草へんぷ」の先に、いくつもの勾玉を綺麗に飾り付けて捧げました。岩戸の前に集まっていた神々による演出が、いよいよ最高潮に達し、今まさに岩戸が開かれようとした時、天太玉命が捧げた神秘の草へんぷの先に、一羽の鳥が舞い降りました。神々はこれを吉兆と見て、大いに喜びました。この鳥はあまのひのみのみこと

天日鷲命 という神となりました。天日鷲命は日本武尊と共に、「西の市」で有名な鷲神社にて、今も祀られております。

そして剣山にほど近い徳島県に、今も「三木家」という一族がいます。この三木家こそ、皇太子が天皇陛下へと即位の際に行われる「大嘗祭」において、もつとも重要な「籠服」という織物をへんぷから作る一族です。そしてこの三木家は、阿波忌部氏という一族の末裔です。さらにこの忌部氏の先祖こそ、先ほどご紹介した岩戸開きの際に、「神秘の草へんぷ」を捧げた天太玉命 なのです。ですから三木家が今も暮らす四国徳島県は、神秘の草へんぷの聖地と言われております。

そして日本人ならば、誰もが知ってほしいことなのですが、岩戸の中から出て来られた天照大神の孫にあたるのが天孫降臨された邇邇芸命であり、この邇邇芸命の曾孫が、紀元前660年2月11日に、日本を建国された「カムヤマトイワレビコノミコト」こと初代神武天皇です。そして神武天皇から令和の今も天皇陛下が126代続いているわけです。こうしたことから分かるように、日本という国は神話が今も続いている世界最古の国なわけですね。

このように神道、天照大神、その末裔である最高神主天皇陛下、さらには皇室、そして私たち日本国民と「神秘の草へんぷ」は、切っても切れない深い縁があるのです。つまり「神秘の草へんぷ」は、精神的にも、物質的にも、日本人のシンボルともいえる「神聖な植物」であり、「もし、桜を日本の国花とするならば、へんぷは日本の国草である」、そう言うてもけっして過言ではありません。

## アヘンやコカインと同一視

しかし今、日本人が、自分たちの暮らしを救ってくれるはずの、「神秘の草ヘンプ」を誤解し、忌み嫌い、「悪魔の草」と誤解しております。そのために私は、本書の中であえて「ヘンプ」という外国の呼び名を使っているわけです。

なぜでしょうか？なぜ日本人は、自分たちに馴染み深い神聖な国草とも呼ぶべき植物を、「悪魔の草」と誤解して暮らしているのでしょうか？それは1840年からイギリスと清のあいだ起きた、「アヘン戦争」に原因があります。アヘンとはケシという植物の実を削って、その樹液から作られるもので、人間を廃人に変えてしまう恐ろしい麻薬であり、またアヘンは「ヘロイン」という麻薬の原料でもあります。

アヘン商人たちは、中国、インド、イギリスといった「三角貿易」で莫大な利益を上げました。そこで清王朝は、自国民がアヘンによって麻薬中毒になり、廃人になり、おまけに金まで持ち出されるので、麻薬商人たちを追い出し、さらには清に密輸されているアヘンを没収して、焼き払いました。それはまさに人間として、国家として当然とも言える行動でした。しかし利益を損なわれたアヘン商人たちは、これに腹を立て、莫大な財力を使ってイギリス政府を動かし、「アヘン戦争」に踏み切ったのです。

世界中の多くの人々がアヘンという麻薬を心底、恐れしました。なぜならアヘンが、人間個人を廃人にするばかりか、戦争によって国家から領土まで奪ってしまったからです。ケシという植物からアヘンも、モルヒネも、ヘロインも作られます。一方でコカという植物からは、コカインが作られます。アヘンも、ヘロインも、コカインも、ともに人生を滅ぼす麻薬であり、まさにこれらは悪魔のクスリ、「魔薬」なわけです。（※ケシは医療で鎮痛剤として使われているモルヒネの原料でもあり、人間の使い方に問題がある）

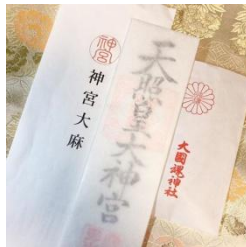
そしてこれらの麻薬は、ケシやコカといった植物から作られています。ですからヘンプのように植物の中には、石油に代替物し、石油を超越する素晴らしい「神秘の草」もある一方で、ケシやコカのように魔薬を作り出す草もあるわけです。そうしたことから1924年、「アヘン条約」が世界規模で結ばれて、実はこの時に、「麻薬」という日本語が生まれしました。ですからそれまで「麻薬」という日本語は無かったわけであり、つまりこの「麻薬」という日本語は、造語されてから、まだ百年と経たない割と新しい日本語なわけです。

そしてその後、日本は先の大戦に引きずり込まれて、敗れていきます。するとセブンスターズはGHQを使って、「ヘンプ」という植物は、ケシやコカとまったく同じ危険な植物であり、**麻薬**である」という洗脳を、教育とマスコミを使って日本人に施していったのです。そして七十数年の月日が過ぎ去ると、「ヘンプ＝悪の草・麻薬」という方程式が、見事なまでに日本人の頭の中で出来上がってしまったのです。だから本書ではまだ日本名を使わずに、「ヘンプ」と呼んでいるわけです。しかしすでに述べてきましたように、神秘の草ヘンプと日本人は、古来より馴染み深く、ある意味においてヘンプは国草なのです。

## 六味には出来なかつたGHQ

では、**神秘の草ヘンプ**とは何かと言えば実は「麻」です。「大麻」とも、「おおぬき」とも呼ばれ、そして「大麻」と呼ばれることもあります。「麻」を英語にすると、「ヘンプ」と言うのですが、しかしあまりにも、あまりにも多くの日本人々が「大麻は麻薬」という価値観を持ち、忌み嫌い、嫌悪しているために、あえてこれまで英語で「ヘンプ」と呼んできたわけです。

「麻薬のはずの大麻が石油に代替し、石油を超越するなんて信じられない」と、そう思うかもしれません、「大麻麻薬」というこの方程式はまさに、セブンスターズが教育とマスコミ使つて行った「洗脳」そのものであります。なぜなら本来、神道において、「麻は罪穢れを祓うもの」という価値観があり、伊勢神宮のお札も実は「神宮大麻」と呼び、大麻は天照大神の御印とされているからです。写真にもありますように、大麻の聖地である四国徳島県をはじめ日本全国各地に「大麻神社」があります。天皇陛下の即位の際の「大嘗祭」において、もつとも重要な「**禊服**」という織物が、麻から出来ていることはすでに述べましたが、神社に見られる綱なども麻から出来ており、実は麻を抜きに神道を語ることはできないのです。



しかしGHQによって「麻<sup>あさ</sup>」という字も変わり、日本語の「麻薬」も「麻薬」へと変えられてしまいました。実はGHQは意図的に日本語を変えて、日本人を洗脳してきたのです。たとえば「天<sup>てん</sup>」という文字が変形して出来上がった「气<sup>き</sup>」、この中にエネルギーを象徴し、日本人と非常になじみ深い「米<sup>めい</sup>」という文字が入ることによって、かつてはポジティブな感じで「氣」という文字が出来上がっていました。しかし戦後はGHQによって「メ<sup>めい</sup>」という文字に変えられ、「氣」と表記するようになりました。まったく日本人の「氣<sup>き</sup>」を、内側に閉じ込め、ネガティブにして、心までを封じ込めたいかのようなのです。これと同様に、造語されたばかりの「麻薬<sup>まやく</sup>」という言葉も、もともとは「麻れる」という漢字が使用されていたのですが、戦後になると「麻<sup>あさ</sup>」という漢字が使われるようになってしまったわけです。

そしてGHQの占領期間中である1948年7月10日、「大麻取締法」という法律が成立して、「大麻は麻薬であり、ケシやコカと同じで危険な植物である」と法律で決められると同時に、その間違った価値観が、教育とマスコミによって、日本国中に広められていったわけです。

こうして私たち日本国民は、実はすぐ近くに石油よりも遥かに素晴らしい、神秘の植物がありながらも、その「麻はケシやコカと同じで悪である」という価値観を持たされたことから、神秘の草・麻を使うことなく、その何倍、何十倍も高い石油に依存して暮らし、隷属させられているわけです。

まさに先の大戦は、「大麻侵略」でもあり、「資源侵略」でもあり、「意識侵略」でもありました。

しかし大麻は麻薬ではありません。もちろんマリファナとして吸引することもできますが、しかしこのマリファナ一つとっても、ヘロインやコカインのように、人生を滅ぼすようなドラッグではありません。もちろんアルコールでも人生を楽しくする人もいれば、アルコールによって人間として成すべきことを成さずに、人生をボロボロにする人もいますから、個人の問題もあります。とにかく麻はもともと麻薬ではなく石油に代わり、石油を超える神秘の草なのです。

麻が日本人と非常に馴染深いために、GHQでも洗脳し切れなかったものの一つに、「七味唐辛子」があります。実は日本食の「そば」や「うどん」によく使われる「七味唐辛子」には、必ず「麻の実」が入っており、GHQも「六味」にすることまではできなかったのです。しかも麻の実は、食料としても申し分なく、ササミやマグロなど以上に高タンパク質、低脂肪で、とても体に良い食料でもあります。



しかも麻が素晴らしい、さらなる証拠があります。それは神道におけるこの神聖植物は、実はウツや自閉症などの発達障害にも大きな効果があるのです。大麻に含まれる「CBD」という成分は、現在の日本においても、サプリメントとして販売されています。そして「CBD」による改善症状別は、なんと250種類を超えるのです。

自閉症、アスペルガー症候群・不安障害・パニック障害・広場恐怖症・強迫性障害・気分変調性障害・神経衰弱症・老年痴呆・振戦せん妄・統合失調症・統合失調感情障害・躁病・突発性大うつ病・反復性大うつ病・双極性障害・書痙・心因性インポテンツ・アルコール依存症・オピエート依存症・鎮静薬依存症・コカイン依存症・アンフェタミン依存症・アルコール乱用・タバコ依存症・心因性多汗症・心因性幽門痙攣・心因性排尿障害・歯ぎしり・吃音・神経性食欲不振症・非特異的チック障害・トウレット症候群・持続型不眠症・悪夢・過食症・緊張性頭痛・心因性疼痛・外傷後ストレス障害(PTSD)・器質性精神障害・脳振盪後症候群・非精神器質性脳症候群・頭部外傷・間欠性爆発性障害・抜毛癖・非多動性注意欠陥障害・注意欠陥・多動性障害・その他の注意欠陥障害・その他の心因性疾患・パーキンソン病・性器ヘルペス・ペニスのヘルペス感染・エイズ関連疾患・西部ウマ脳炎後遺症・化学療法回復・带状疱疹・放射線治療・慢性ウイルス性 $\alpha$ 型肝炎・慢性ウイルス性の型肝炎・節足動物媒介疾患・ライム病・ライター症候群・ポリオ後症候群・悪性黒色腫・その他の皮膚癌・前立腺癌・精巣癌・副腎皮質癌・悪性脳腫瘍・多形神経膠芽腫・癌全般・リンパ節細網癌・骨髄性白血病・子宮癌・リンパ腫・グレーブス病・後天性甲状腺機能低下症・甲状腺炎・成人糖尿病・インスリン依存型糖尿病・偶発性成人糖尿病・糖尿病性腎症・糖尿病性眼科疾患・糖尿病性神経障害・糖尿病性末梢血管病・低血糖症・脂肪腫症・関節障害、痛風・ムコ多糖症・ポルフィリン症・アミロイド症・外因性肥満症・病的肥満・自己免疫疾患・血友病 $\gamma$ ・ヘノツホ・シェーンライン紫斑病

麻という植物は石油に代わり、石油を超え、しかも医薬品にもなり、なおかつ良質な食料にもなり、そして日本の国草とも云うべき神秘の草です。だからこそ私たちは善悪に対する「常識の逆転」をする必要があります。

## 石油は化石燃料ではなかった？

さて、セブンシスターズによって隠蔽されてきた真実として、「大麻が石油にすべて代替し、なおかつ超越する」という驚くべき話を述べましたが、石油に関するデマとして、実は近年、「石油は化石燃料ではなかった」という説が有力になってきています。

これまでの通説では、「石油は数億年前の生物の死骸が堆積し、長い年月をかけて変化してきた化石である」と考えられてきました。こうした通説から石油、石炭、天然ガスは、「化石燃料」と呼ばれて、そして「あと30年で石油は枯渇する」と言われてきたわけです。すなわち「石油、石炭、天然ガスは、化石燃料であるから、いつか枯渇する」という通説が、そもそも人類を欺いてきた石油会社の宣伝だったらどうでしょうか？自分たちの利益のために、プロパガンダを行って人々を欺くのは、何も中国共産党だけではありません。

これまで石油は「有機物」と考えられてきましたが、しかし最近では、「無機物」と考えられ始めています。ごくごく簡単に言ってしまうえば、たとえば紙は有機物です。なぜなら紙の原料は木であり、木はもともと生きていたからです。1円玉は無機物です。なぜならアルミは生きていないからです。そしてこれまで「水は無機物であるが、石油は数億年前の生物の死骸の化石だから有機物である」とされてきましたが、しかし近年の研究によれば、「石油も水と同じく無機物である」という説が有力になりつつあるわけです。まあ、石油が30年で枯渇するどころか、2000万年もあるならば、無機物と考えることのほうが妥当でしょう。

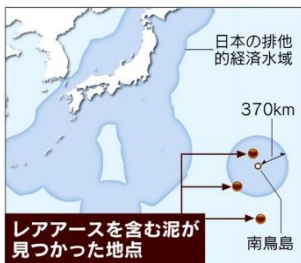
これを考えるにあたり、人類が知らなければならない科学者がおります。それはアメリカ合衆国で活動した天文学者トーマス・ゴールドという方です。彼の見解によれば、「石油、石炭、天然ガスは、今も地球の奥底で生成され続けられており、原油の中に含まれる有機物の成分は、細菌か、後から入り込んだ動植物である」ということです。実はロシアはこの事実について、すでに数十年前から気づいており、1956年、ウラジミール・ポリヒイエフ博士は、次のように主張しました。「原油は地球のマグマに近い『超深度地帯(500m以上)』で、自然発生的に形成された資源である。これを有機物ととらえる発想は、『資源有限説』を理由に、原油の価格を高くしようとする西側石油資本の陰謀である」と。これらの話の科学的根拠として、石油の分布は、生物の分布と明らかに異なっています。また、生物の化石が存在して

ない火山などの岩石の中からも原油は見つかっています。あるいは化石燃料では考えられないほど奥深い地底、すなわち「超深度地帯」からも原油が見つかっています。日本でも秋田県の八橋油田が有名であり、近年、アメリカでも、「シェールガス」という天然ガスが見つかり、いつの間にかアメリカは資源大国になりましたが、何のことはありません。もちろん中東などでは地表から石油が噴き出しておりますが、地面をマグマに近い超深度地帯まで掘れば、どこでも石油、石炭、天然ガスが手に入る可能性がたしかにあるのです。

ですから石油価格を吊り上げるために、「石油は化石燃料であり、有機物だから、その量は少なく、希少価値があり、あと30年で枯渇する」と、私たち人類がセブンスターズによって欺かれ続けている可能性は確かにあるのです。石油は地球上で水に続いて2番目に多い液体であり、実は超深度まで掘れば、どこにでも埋まっており、「石油に値をつける」という行為は、実は「水に値をつける」という行為と同じ可能性は確かにあるわけです。

もちろん今後も、石油に関して科学的調査が必要ですが、すでに述べましたように大麻は石油にすべて代替し、なおかつ石油を超越するのですから、人類がエネルギーに困ることは本当はないはずなのです。「エネルギーに困る」と思っているのは、石油を独占支配するセブンスターズによってそう思わされているからであり、そして「石油奴隷支配」の状態に置かれているからです。これはまさにセブンスターズによる「洗脳」です。

ですから本当は日本も資源大国です。2018年4月、日本の最東端にある南鳥島（東京都）周辺の海底下で、世界の消費量の数百年分に相当するレアアースが1600万トン超も発見されましたが、未だにほとんどの日本人が知らないように、実は日本こそ資源大国なのです。「そんなバカな!？」、「そう思って当然です。教育が嘘を教え、マスコミが何も伝えないのですから。「レアアース1600万トンの発見」なんて大ニュースは本来、号外を配っても良いほど大事件ですが、テレビは完全にスルー、新聞も一面で報じたところは一紙もなく、『朝日新聞』が小さな記事で報じたくらいです。なぜなら日本は先の大戦に敗れて以来、金融や石油などを通じて植民地状態にあるために、教育は真実に織り交ぜて嘘を教えることしかできず、マスコミは何も大切な真実を報じることができないからです。しかし本当の日本の姿は技術大国であり、資源大国なのです。



## ペットボトル・リサイクルの嘘

さて、セブンスターズは、石油価格を吊り上げるために、様々なプロパガンダを行っているわけですが、そうしたプロパガンダの一貫で行っているデマはまだあります。そしてそのデマのために、すべての日本人が毎日のように無駄な労力を強いられて、そしてお金を無駄にしているのです。

そのデマとは、「エコ」と称して日本国民に行わせてあるペットボトルのリサイクルです。すでに述べましたように、ペットボトルなどのプラスチックは石油からできています。そのために「貴重な資源を大切に、地球に優しく」ということで、私たち国民はペットボトルの分別を強制的に行わされています。では、本当にペットボトルのリサイクルは地球に優しいのでしょうか？そして本当にペットボトルのリサイクルは行われているのでしょうか？

ペットボトルのリサイクルというと、おそらく多くの人のイメージとしては、「ペットボトルを一度溶かしたり、細かくして、もう一回ペットボトルを作ったり、もしくはペットボトルから服や工業製品を作る材料にしている」というものではないでしょうか？しかし実はペットボトルのリサイクルをするためには、新しい石油から直接、新しいペットボトルを作るよりも、ずっと多くの石油を使わなければならない、しかもコストも高いのです。

武田邦彦教授の調べによれば、石油からペットボトル1個作るときのコストは約7.4円だそうです。しかしリサイクルすると、輸送費用や集荷費用だけで26円もかかります。つまり輸送と集荷だけでも、リサイクルペットボトルの価格は、新品ペットボトルの価格の約3倍もするわけです。

例えばバケツの中に水を入れて、そこに赤インクを垂らしたとします。そして仮に「赤いインクは資源だから、赤いインクだけ取り出したい」と考えても、それは無駄なことです。なぜなら赤いインクだけを取り出そうとすれば、かえって多くの費用や労力がかかるからです。無駄な労力とコストをかけて赤インクだけをバケツから取り戻すくらいならば、むしろ新しく赤インクを作ったほうが、ずっと環境にも良く、地球にも優しいわけです。これとまったく同様に、ペットボトルもリサイクルして、多くの石油や労力やお金をかけずに、新しい石油から新しいペットボトルを作ったほうが、よっぽど本当のエコなわけです。

ですから使い終わったペットボトルは、実は貴重な資源ではなくゴミであり、そして石油製品は良く燃えるために燃や

してしまおうのが一番良いのです。なぜなら湿気の含んだ「生ゴミ」や「燃えるゴミ」だけでは、実はなかなか温度が上がりにくく燃えないために、わざわざ石油をまぜて燃やしているからです。

また武田邦彦先生のお話によれば、リサイクル企業の倒産が相次いでいることから、ペットボトルのリサイクルを行っているはずの企業でも、現実にはリサイクルを行わずに、隠れて焼却処分しているところもあるようです。「環境のために」と正義感に燃えて、リサイクル企業に就職した若者たちが、リサイクルの現実を知って失望していることもあるようです。

ですからペットボトルは分別せずに、燃えるゴミとして出すのが一番良いのです。こうした話をすると、「プラスチックを燃やすとダイオキシンが」と口にする人がおります。ここにまた、「石油に関するデマと洗脳」があります。一期、日本ではダイオキシンが騒がれましたが、実はダイオキシンは塩よりも毒性が低いことも分かっております。醤油だって一気飲みしたら死にますが、後に科学的に明らかになったことですが、ダイオキシンの毒性は塩以下だったのです。にも関わらず日本では、ほとんどの地方自治体が、「ダイオキシンが」と騒いで、莫大な税金を投じて800度以上の焼却施設をすでに持つており、もはやダイオキシンの出ないゴミ処理技術があります。

「では、なぜ日本政府はペットボトルの分別とリサイクルなんて無駄なことを国民にさせているのか？」と、そのように疑問を感じるかもしれません。その理由は簡単です。「石油はあと30年で枯渇する貴重な資源である」という洗脳を、日本国民に日々の暮らしで植え付けるためです。おそらく「プラスチックを燃やすとダイオキシンが出る」というデマを垂れ流し、「ダイオキシン騒動」を起こしたのも、「ペットボトルはリサイクルしなければならない」という洗脳を行うためだったのでしょう。

また「子どものうちから石油は貴重な資源だから」と洗脳を施すために、日本の小学校などでは、これまで頻繁に「エコキャップ運動」というものが行われてきました。ペットボトルのキャップをたくさん集めて途上国に送るという運動です。しかしこれも調べて見れば簡単に分かりますが、むしろ送料のほうが高くつき、その送料のお金を途上国の人たちにあげたほうが、はるかにコスト的に良いのです。セブンスターズ幼いうちから、そして日々の暮らしの中で、「石油は貴重な資源」という洗脳を私たちに行ってきたのです。

「エコが大事、地球に優しく」と言うのであれば、ペットボトルをわざわざ洗ってゴミに出す行為が、もはや水資源のムダ遣いであり、プラスチックを分別し続けることが労力の無駄であり、良く燃えるペットボトルを高いコストをかけて分別回収して、しかも石油を使ってゴミを処理することが反エコなのです。

## 時代を超越したニコラ・テスラ

そして人類が、新しき繁栄の時代を迎えるにあたり、知らねばならない科学者が一人、存在しております。それは「ニコラ・テスラ」という偉大な科学者です。彼はエジソンよりも9歳年下で、そして「エジソン以上の大発明家」と云われつつも、多くの人がその名を知らず、歴史から消されてしまった超天才です。

エジソンは「直流電流」を中心とした送電システムを構築しようとしていました。この送電方法は懐中電灯などで使われています。しかしテスラは「交流電流」という送電方法を発案しました。この送電方法はコンセントなどで使われています。ですから普段から懐中電灯で生活している人がいないように、私たちがよく使っているのは「交流電流」です。エジソンとテスラは「どちらの送電方法が人類に役立つか」ということを巡って、激しい「電気戦争」を行いました。しかしその勝敗は、私たちの現在の暮らしを見れば一目瞭然であり、勝者は、ニコラ・テスラでした。エジソンは述べます。「天才とは1%のひらめきと99%の努力である」と。ニコラ・テスラは述べます。「天才とは99%の努力を無にする、1%のひらめきのことである」と。

「交流電流」の他にも、テスラは数多くの発明を残しております。たとえばラジオは、グリエルモ・マルコーニという科学者が明者だと信じられていますが、実はテスラがマルコーニより以前に発明していたことが証明され、1943年に最高裁判所は、特許をマルコーニのからテスラに変えております。テスラが発明した「電気モーター」は、電気自動車を実現させ、実はイーロン・マスクがCEOを務める電気自動車メーカー『テスラモーターズ』も、このニコラ・テスラから名前を取って社名にしています。また、テスラは初めてのリモートコントロール（リモコン）のボートで、1898年にデモンストレーションを成功させました。

ニコラ・テスラは、数多くの発明を残し、なおかつエジソンに「電気戦争」で勝利し、「エジソン以上の発明家」と云われながら、その名をあまり知られておりません。なぜでしょうか？それは「エジソンが時代に見合った超天才ならば、テスラは時代を逸脱した超天才であったから」とも言えるかもしれません。

なぜならニコラ・テスラは、「フリーエネルギー」を発見したと云われているからです。テスラは、「テスラコイル」というものを開発し、電線を使わずに電気を供給することのできる、「ワイヤレス送電」を提案しました。実際に2007年6月、マサチューセッツ工科大学は、「無線送電」、「ワイヤレス送電」に成功しています。つまりテスラは、マサチューセッツ工科大学よりも、はるか百年以上前に、「ワイヤレス送電」を実現しようとしたわけです。

電線の無いつまり「無線」による電力の送電システムと、情報伝達システムを、ニコラ・テスラは「世界システム」と名づけました。すなわちニコラ・テスラという人物は、自身が発明した「テスラコイル」によって、世界中のどこからでもエネルギーを無料で得られるフリーエネルギーの世界、「世界システム」を実現しようとしたわけです。

彼は1943年に亡くっておりまますから、もしもこの話が本当ならば、人類の歴史は大きく変わっていたことでしょう。しかしテスラが研究を完成させる前に、彼に融資していた銀行家で、なおかつロスチャイルドの盟友でもあるJ・P・モルガンが、彼の研究から手を引きました。なぜならテスラに融資していたモルガンは、電線に使われる銅を独占支配していたからです。「電線の要らない世界」は「銅が売れなくなる世界」であり、これがモルガンの逆鱗に触れることになり、テスラは研究費を断たれてしまいます。しかもテスラの研究所は、何者かに焼き払われてしまいました。

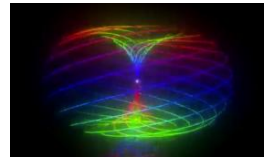
偉大な発明家は、その名さえ知られず、金銭に苦しみながら寂しく死んでいったのです。

## 現実のフリーエネルギー

信じがたいかもしれませんが、「フリー・エネルギー」は、すでに現実にはすでに存在しています。もしも無料で、なおかつ無限に使えるエネルギーがあれば、人類の幸福に大きく貢献するわけですが、実は「フリー・エネルギー」はすでに現実に存在するのです。数学者たちは図の数式を「トラス」と呼びます。そし

$$V = 2\pi^2 Rr^2$$

Torus



てこの図は、その「トールラス」を視覚的に表したものです。

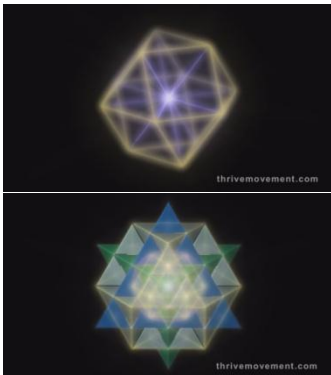
「トールラス」のエネルギーは、一方から流れ込み、中央を回って、もう一方の端から出ていきます。この「トールラス」は、リングやオレンジなどの断面にも見られますし、自然が発生させるたつ巻にも見られれば、ヘリコプターなどのように人工的な乗り物にも見られます。あるいは人間の周りにも同じような磁場があり、そして地球を取り巻いている磁場にも、この「トールラス」は存在しています。そればかりか巨大な銀河の構造から、小さな原子の構造にまでも常に「トールラス」はみられます。科学者たちの話によれば、宇宙におけるエネルギーの流れは、大きなものから小さなものまで、ありとあらゆる規模において、この「トールラス」の形を取っているそうです。

「トールラス」、新しき繁栄の時代の扉を開くためにも、ぜひともこの言葉を覚え、そして人に語ってください。そしてこの「トールラス」のエネルギーの流れの根本には、骨格のような構造があるそうです。発明家で思想家のバック・ミンスター・フラウという方は、この「トールラスの骨格構造」に対して、「ベクトル平衡体」と名付けました。

「ベクトル平衡体」を少し展開すると、「四面体」と呼ばれる「ピラミッド」が、計64個になります。逆から言えば64個のピラミッドが、「ベクトル平衡体」を形成し、この「ベクトル平衡体」が、「トールラス」の骨格であるわけです。では、「ピラミッド」とは、果たして何なのでしょう？実は近年、「ギザの大ピラミッドはエネルギー装置であった」という説が有力になりつつあります。これまで「ピラミッドは王家の墓である」とされてきましたが、しかし「ピラミッドは墓ではない」という説のほうが進んで有力なのです。

たとえば「王家の谷」という土地には、古代エジプトの王たちの墓が密集しておりますが、その姿はピラミッドとは全く異なっております。なぜなら王家の谷にある王墓の内部には、さまざまな装飾がされていますが、ピラミッド内部には、それといった装飾がないからです。

ピラミッドがそびえ立つギザ台地は、どういいうわけだが地球の磁場が集中しているそ





うです。また地球内部では、「地電流」と呼ばれる電流が流れているのですが、「なぜかピラミッドの地下には 強力なエネルギーが蓄えられている」ということも分かっています。あるいはドイツとロシアの研究チームが、ギザの大ピラミッド内部の部屋には、地磁気が集中していることも突き止めています。

また古代エジプト人は、どうやら電気の存在を知っており、それを利用していた痕跡もあります。なぜなら暗いピラミッドの内部には、松明や火の灯りを使った痕跡がまったくないからです。そればかりか古代エジプトの神殿では、電灯らしきものまで発見されています。実際に「バグダッド電池」と呼ばれるものが発見されており、これは古代イラク・バグダッドで製造されたとされている素焼きの壺なのですが、近年、電池メーカーがこの「バグダッド電池」の復元実験を行ったところ、電流が発生することが確認されたのです。しかも近年の調査結果によれば、「かつてのピラミッドは、化粧板で覆われ、太陽の光を反射して白く輝き、さぞかし荘厳な光景だったのでは？」と言われております。これがイメージ図です。

つまり古代の人々は、高度な科学知識を持ち、白く光り輝くピラミッドから、フリーエネルギーを得て、生活をしてきた可能性があるわけです。このようにどうやら「エネルギー」と「ピラミッド」には、密接な関係にあり、そして64個のピラミッドから「ベクトル並行体」というものが構成され、この「ベクトル並行体」が骨格となつて、「トールラス」という大宇宙を貫くエネルギーの流れがあるわけです。

しかも実は、この「トールラス」や「ベクトル並行体」は、さまざまな文化の中で、何千年にもわたつて記号化されてきました。つまりなぜか古代文明は、「トールラス」の存在を文字や建造物によって、後世の私たちに伝えてくれているのです。たとえば世界最古の聖地の一つに、エジプトのアビドスの「オシリス神殿」があります。オシリス神殿では、文字がほとんど発見されていませんが、この神殿には「トールラス」の図が、非常に薄く、しかもはつきりと正確に岩に記されています。これは岩に刻み込まれているのでも、彫られているわけでもなく、岩の原子構造に「トールラス」が焼き付けられているのです。中国の「太陽の神が宿る」とされている門には獅子おりますが、その前足の下にも「ト



「ラス」と「ベクトル並行体」の模型があります。ナツシム・ハラメインという科学者のよれば、64を元にした図形は世界中で、何世紀にもわたって繰り返して記号化されてきたそうです。

## 空気から電気を取り出す技術

近年、発明家のアダム・トロンプリーという方は、「テスラ・コイル」と「トーラス」からヒントを得ることで、新たな発電機を作りました。なんとそれは、「空気から電力を取り出すことのできる直流発電機」でした。トロンプリーは惑星の磁場を真似て、この発電機の装置を回転させることで、空気から電力を取り出すことに成功したのです。つまりトロンプリーは、テスラの研究を引き継ぎ、トーラスの研究を進めることで、見事に「フリーエネルギー発電機」を発明したわけです。アダム・トロンプリーはこう断言しています。「この発電装置は仮説ではなく、すでに実証されている」と。

トロンプリーは国連や米国上院にも招かれて、このフリーエネルギーの発電機の素晴らしさを、実演して紹介しました。多くの人々がこの発電機が実用化された明るい未来に胸を躍らせました。もしもこの発電機が実用化されれば、この地球上のどの場所からでも電力が得られて、誰もが自由に電力を使えて、世界中が豊かになったことでしょう。石油による奴隷支配と共に、貧困そのものが地球上から消滅するかもしれません。

ですから人類は「ニコラ・テスラ」と同様に、「アダム・トロンプリー」という名も記憶するべきなのかもしれません。しかしアメリカの大統領のパパ・ブッシュ政権の時に、彼の発明の実用化は妨害されて、せっかく造った発電機も、政府の強制捜査によって押収されてしまいました。ブッシュ家は代々、石油事業の経営者であり、第43代大統領ジョージ・W・ブッシュは若い頃に『アルブスト』という石油会社を経営して大成しております。彼の息子のブッシュJr.が大統領になった時、政府高官の3分の2は石油会社の関係者でした。父親が大統領の時には湾岸戦争、息子が大統領の時にはイラク戦争が起きていたことも見逃せない事実です。

テスラの研究を引き継いでフリー・エネルギーの発電機を開発したアダム・トロンプリーの人生の大半は、何とも悲し



きことに、常に自分の研究に関して報道禁止命令の下で、過ごさなければならなかったのです。なぜなら太陽が地球の周りを回っていると信じられていた時代に、「地球は回っている」と述べたガリレオ・ガリレイを見ても分かるように、弾圧・迫害を受けるのは、何も宗教家だけではなく科学者も同様だからです。

実はこのような弾圧・迫害を体験したのはアダム・トロンプリーだけでなく、フリーエネルギーの分野で新技術を開発したほとんどの人が、石油事業者から弾圧・迫害を受けています。たとえば発明家ジョン・ベディーニという方は、数十年前に「テスラの研究」始めて、エネルギー充電装置を開発しました。しかし低価格でこの装置を売り出すことを発表した途端、彼は研究所で襲われて、そしてエネルギー充電装置を製造しないように警告されました。ベディーニは安全のため、充電装置の販売を断念しました。あるいはカナダのジョン・ハチソンという科学者は、「テスラ・コイル」をもとに、フリー・エネルギー装置を発明しただけでなく、なんと「テスラ・コイル」を研究していたら、なぜか物体が引力に逆らって浮き上がってしまいました。このハチソンの「フリーエネルギー」と「物体を浮かび上がらせる研究」は、人類の科学技術を一変させるはずでした。しかしハチソンの研究は1978年、1989年、2000年と三回にわたって強制捜査を受けて、開発された装置も押収されてしまいました。

なぜ、こんなことが起こるのでしょいか？たとえば元理研の小保方晴子さんが研究されていた「STAP細胞」、もしもこの研究が進み、実用化されていくと、人類はありとあらゆる病から解放されると云われています。しかし日本だけでも医療利権は38兆円と云われております。これは「一般会計」の税収に匹敵する金額です。ですから「フリー医療」は、製薬医療業界、もしくは保険業界にとって大打撃となるわけです。

そして数多くの科学者たちが、「フリーエネルギー」を研究してきたわけですが、この新しき繁栄の時代の扉をこじ開ければ、石油による奴隷支配が終わるわけです。だからJ・P・モルガンが、テスラの研究を妨害したが如く、「フリーエネルギー」の研究を、妨害し続ける者たちがいるわけです。

## 常識の逆転

本当に日本国民および人類が目覚めれば、私たちの暮らしは見違えて繁栄していきます。大麻によって石油奴隷支配から脱出し、なおかつ「フリーエネルギー」という大繁栄の扉は、すぐ目の前にあります。

あとは日本人がこの扉の存在に気づくか気づかぬか、ただそれだけなのです。

教育とマスコミが築き上げてきた常識が間違っているのです。「悪」と思っているところに「善」があり、「善」と思っているところに「悪」がある、そんな狂った常識が、そこら中に溢れているのです。だからこそマスコミと教育が行っている洗脳から、一刻も早く目覚める必要があるのです。それはまさに「常識の逆転」であり、それはまるで『桃太郎』という話のようです。

『桃太郎』という話を思い浮かべれば、誰もが話の内容をみることなく、「桃太郎が正義で鬼が悪」と考えるものです。しかし芥川龍之介という作家が書かれた『桃太郎』はまったく逆でした。芥川龍之介の『桃太郎』では、桃太郎は真面目に働くのが嫌だから家から放り出されるカタチで、仲が悪いイヌやキジやサルを共にして、鬼ヶ島に出かけました。そして桃太郎たちは、真面目に暮らしていた鬼に乱暴狼藉をはたらいて、財宝を奪い取ったのです。ですから『桃太郎』という話でも、「昔話」と「芥川龍之介の話」の二つがあり、その内容をみなければ、どちらが正義で、どちらが悪なのか、それは分からないのです。これとまったく同様に、何が正義で、何が悪なのか、きちんと内容を調べてみなければ分かりません。

勉強した人ほど、「石油は化石燃料であり、有機物であり、有限である」と一生懸命に学んで来ましたが、高度に洗脳されていることがよくあります。そして勉強した時間を許せず自己保身の想いから、間違った知識を信じ抜き、正しい情報をシャットアウトすることもあります。そして間違った知識を巧みに使いこなして、真実を否定することがよくあります。だからこそマスコミと教育による洗脳から目覚める必要があるのです。

そうやって常識を逆転していく時、私たちは新しい繁栄の扉を拓くことができます。

「自らが豊かになろう」と想い、勉強に、仕事に励むことは大切なことです。「天は自ら助く者を助く」という言葉にもありますように、自助努力の精神は大切です。しかしながら「国を豊かにしよう」、「世界を豊かにしよう」という想い

こそ今、私たちには必要不可欠なのです。それはまさに、「国を助ける努力」とも、あるいは「世を救う努力」とも言えるかもしれませんが、こうした公のための努力があつてこそ、国家や世界が繁栄することで、自らもまたさらに豊かになつていくことができるのです。ですからどうかセブンスターズがマスコミと教育を使つて行つた洗脳から目覚めて、常識を逆転させて、公のための努力を共に進めてください。

私たちは共産主義を否定しつつ、資本主義を乗り越えていかねばなりません。

## あとがき

さて、初めてこうした内容を読まれる方にとつては、おそらくおどろきの連続であつたことでしょう。それほどまでに世の中は腐つていっているのです。

だから真実を広める必要があるのです。

だから勇気が必要なのです。

だから私たちは一般社団法人『武士道』は、仲間と共に命を懸けて真実を世の中に知らしめると共に、日本に侍精神を取り戻そうとしているわけです。

新しき繁栄の次代は、一人一人に本物の勇気さえあれば、すぐそこです。

どうか冒頭でも述べましたように、勇気をもつて本書の内容を一人でも多くの方に拡散してください。

本書は電子書籍でも、ネットからでも読めます。

なお、フリーエネルギーと陰謀に興味ある方は、ぜひ映画『THIRIVE』をご覧ください。問題の解決方法は異なりますが、エネルギーと陰謀を知ることができます。

私たち一般社団法人『武士道』は、世の人々を目覚めさせ、啓蒙するために、「特攻精神」でもって命を懸けて、「特攻街宣」と称して街宣活動を行っております。

そのために2019年12月4日現在、347名以上の方々から、寄付金のご支援を頂き、4,553,438円集まりました。

世の常識を遂転させるために、石油のみならず大麻オイルでも走るヘンプカーの購入を予定しております。

千円でも、百円でも構いません。ぜひとも一人でも多くの人々を目覚めさせて、世の常識を変えるべく、熱きご支援をください。

武士道街宣応援寄付は…

●ゆうちょ 当座(寄附受付) 00280-4-105770

●ゆうちょ銀行 店名:〇二九(ゼロニキュウ)  
当座:0105770